11 古文

学習目標
- 「古文の基本」（72〜75ページ）で身につけた知識を使って、いろいろな古文の読解問題を解いていこう。
- 主な古文の種類や、古典文学史について学ぼう。

要点のまとめ

1 主な古文の種類

日記	出来事や感想などを日にち別にまとめた記録。
随筆	自然や事物や人物について自由に書き留めたもの。 →筆者の感想が文章の初めや終わりに書かれていることが多い。
物語	和歌と物語が一体となった歌物語、架空の物語である作り物語、歴史を描いた歴史物語、戦いを題材とした軍記物語などがある。
説話	世間話や伝記、神話などを集めたもの。民間の伝承を集めた民間説話や、仏教の教えを語るための仏教説話がある。 →エピソードから得られる教訓についての作者の考えや感想が、文章の初めや終わりに書かれていることが多い。
笑話	滑稽な内容の笑い話。→落語の「落ち」に当たる内容が最後にある。
紀行文	旅で見聞したことや、その感想を文章に著したもの。

2 古典文学史

■主な文学作品

奈良時代
- 歴史書…古事記、日本書紀
- 和歌…万葉集

平安時代
- 和歌…古今和歌集
- 日記…土佐日記（紀貫之）
- 随筆…枕草子（清少納言）
- 歌物語…伊勢物語
- 作り物語…竹取物語、源氏物語（紫式部）
- 説話…今昔物語集

鎌倉・室町時代
- 和歌…新古今和歌集
- 随筆…方丈記（鴨長明）、徒然草（兼好法師）
- 軍記物語…平家物語
- 説話…宇治拾遺物語、古今著聞集

江戸時代
- 浮世草子…日本永代蔵（井原西鶴）
- 浄瑠璃…曾根崎心中（近松門左衛門）
- 俳諧…おくのほそ道（松尾芭蕉）
- 読本…南総里見八犬伝（曲亭（滝沢）馬琴）
- 国学…古事記伝（本居宣長）

■三大和歌集

※勅撰和歌集＝天皇や上皇の命令により編集された和歌集。

歌集	成立	撰者	歌風・特徴
万葉集	奈良時代	大伴家持？	素朴。現存する日本最古の歌集。
古今和歌集	平安時代	紀貫之など	技巧的で繊細優美。最初の勅撰和歌集。
新古今和歌集	鎌倉時代	藤原定家など	絵画的で象徴的。八番目の勅撰和歌集。

■三大随筆

作品	成立	筆者	特徴
枕草子	平安時代	清少納言	宮廷生活や風物などの感想。「をかし」の文学。
方丈記	鎌倉時代	鴨長明	無常観に貫かれた随筆。流麗な和漢混交文。
徒然草	鎌倉時代	兼好法師	自然や人生についての深い洞察。

確認問題

1 文学史　現存する日本最古の歌集の名前を漢字で書きなさい。

ポイント　奈良時代に成立したとされる歌集である。

2 文学史　平安時代に書かれた次の作品の作者を後から一つずつ選び、記号で答えなさい。

①　枕草子　［　　］　②　源氏物語　［　　］　③　土佐日記　［　　］

ア　紀貫之　イ　紫式部
ウ　兼好法師　エ　清少納言

ポイント　①・②は女性によって書かれた作品。③は男性が仮名文字を使用して書いた作品。

3 文学史　鎌倉時代に成立した代表的な随筆の作品名を二つ、それぞれ漢字で書きなさい。

［　　］　［　　］

ポイント　平安時代に書かれた「枕草子」とあわせて、三大随筆とよばれる。

4 文学史　「おくのほそ道」と同じ時代に書かれた作品を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　伊勢物語　イ　平家物語
ウ　古事記　エ　南総里見八犬伝

［　　］

ポイント　「おくのほそ道」は、松尾芭蕉による江戸時代の作品。俳諧を中心とした紀行文である。

5 次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

ある翁（おきな）に、「かの人はいかなる人にか（どのような人であるか）」と問へば、「いとよき人なり」と答ふ。「かれは」と言へば、「よき人」と言ふ。必ずかれをば悪（あ）しき（悪い人だ）と言はんを、撰（えら）びてたづねみるに、「よき人」と答ふ。「いかなる事（どういうことか）ぞ」とたづねしに、「人を見るには、まづ十にして五つばかりもよき事ある（人物を評価する　十のうち五つ程度でも）は、いとよき人と見るべし。十にして一つ二つもよき事あるはよき人なり。十にして皆悪しきをば、悪しきと心得給（たま）へと言ひしとぞ。これは人をかく見るなり。

〈松平定信（まつだいらさだのぶ）「花月草紙（かげつそうし）」より〉

(1)　歴史的仮名遣い　〰線「たづねみる」を現代仮名遣いに直しなさい。

［　　］

ポイント　歴史的仮名遣いの「ぢ・づ」を現代仮名遣いに直すときは、「じ・ず」とする。

(2)　会話文　――線「人を見るには」から始まる会話文の終わりの三字を抜き出しなさい。

［　　］

ポイント　会話文の後に付く「と（＋話す動作を表す動詞）」を手がかりにする。

(3)　内容理解　筆者の考えが書かれている一文を、古文中から抜き出しなさい。

［　　］

ポイント　この文章は随筆なので、文章の初めか終わりに筆者の考えが書かれていないかを確かめる。

演習問題

1 次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

餅を好む*入道ありけり。医師なりければ、呼びて、好む由を聞きて、（医者であったので／好きだということ）主、餅をさせけるが、春く声を聞きて、この入道、おうおうと声を揚げ、おめきつつ、果ては畳の縁に摑み付きて、もだえこがれて、「あ（叫びながら／もがき苦しんで）ら堪へがたや。入道が聞かざる所にて舂かせたまへ。彼の声を聞くは堪へがたく候」と云ひければ、これ程の事は希なれども、人毎に好む（これ程のことはめったにないことであるけれども／どの人にも）事あり。いかに物を好まぬ者も、或は徒らなるを好み、或は昼寝を好む者あり。ある僧は、朝の粥を忘れて食はずして、日闌くるまで起きず。「いかに粥をば召さぬぞ」と人云へば、「粥よりも、寝たるは遥かに味の吉きなり」と云ひけり。（召しあがらないのか／日が高く昇るまで／寝ているほうがはるかによい味だ）

（注）入道＝寺に入らず、家にいるままで仏道修行をする人。

〈無住「沙石集」より〉

(1) **主語** ――線ア～エのうち、主語が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ポイント まず登場人物を確認し、「誰が」「何を」聞いたのかを補ってみる。

(2) **歴史的仮名遣い** ～～線「堪へがたや」を現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書きなさい。

ポイント 語頭以外の「はひふへほ」は、「わいうえお」に直す。

(3) **現代語訳・助詞** ――線「人毎に好む事あり」を、必要な助詞を補って、現代語訳しなさい。

ポイント 現代語にしたときに、自然な日本語になるように助詞を補う。

(4) **会話文** 古文中から、「　」を付けることができる会話の部分を抜き出しなさい。

ポイント 会話文の直後に付いて引用を示す言葉（と）を手がかりにする。

(5) **文章の把握** この古文の内容として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　入道は大好きな餅をつく音に我慢できず、叫び出した。

イ　入道は大量に餅を食べさせられて、もがき苦しんだ。

ウ　ある僧は昼寝をしていて大好きな粥を食べ損ねた。

エ　筆者は役に立たない物事を好む人たちを批判している。

ポイント この古文は、「入道」のエピソード→筆者の考え→「ある僧」のエピソードという順になっている。それぞれの内容を把握して、選択肢と照合する。

2　次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

孝道入道、仁和寺の家にて或る人と双六をうちけるを、隣にある越前房といふ僧きたりて見所すとて、さまざまのさかしらをしけるを、勝負の判定をすると言って
にくしにくしと思ひけれども、物もいはでうちゐたりけるに、この僧ものも言わずに
さかしらしさして立ちぬ。①かへりぬと思ひて、亭主、「この越前房は途中でやめて席を立った
よきほどのものかな」といひたりけるに、かの僧いまだかへらで、亭主のうしろに立ちたりけり。かたき、また物いはせじとて、亭主のひざを突きたりければ、うしろへ見むきて見れば、この僧いまだありけり。この時とりもあへず、「越前房は高くもなし。低くもなし。よきほどのものな」と②いひ直したりける、心はやさ、いとをかしかりけり。

（注）家＝仁和寺の中にある、孝道入道の住まいを指す。
双六＝駒とさいころを使って二人で行う遊び。
さかしら＝余計な口出し。

（橘成季「古今著聞集」より）

(1)　古語の意味　――線「にくし」の言葉の意味として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　難しい　　イ　不快だ　　ウ　悔しい　　エ　すばらしい

□

ポイント　「にくし」は現代語の「にくい」とは違った意味で使われている言葉。場面の様子を捉えて、適切な意味を考える。

(2)　主語　――線①「かへりぬ」・②「いひ直したりける」の主語として最も適切なものを次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　孝道入道　　イ　或る人　　ウ　越前房　　エ　作者

①　□　　②　□

ポイント　登場人物を表す言葉は一つだけとは限らない。どの呼ばれ方をしている者が同じ人物で、合計で何人いるのかを、行動を整理しながら読み取る。

(3)　歴史的仮名遣い　～～線「心はやさ、いとをかしかりけり」を現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書きなさい。

□

ポイント　複合語の「はひふへほ」は、元の語に分けて考える。

(4)　主題　この古文のおもしろさについてまとめた次の文の□A・Bに当てはまる言葉として適切なものを後からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

▪孝道入道が、越前房のことを、初めは「□A□」という意味で「よきほどのもの」と言ったが、後ろにまだ立っていることに気づいてすぐに、「背の高さが□B□」という意味の「よきほどのもの」に言い直した機転。

ア　程よい人物　　イ　どうでもよい人物
ウ　親切な人物　　エ　感じのよい人物
オ　いいかげんな人物

A　□　　B　□

ポイント　孝道入道は「よきほどのもの」と二回言っているので、それぞれどのような状況であるかを捉える。

実戦問題

1 次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。 〈長崎〉

曽参（*そうしん）ある時山中へ、薪（たきぎ）を取（とり）に行侍（ゆきはんべ）り。母留主（るす）にゐたりけるに、親しき（行きました／留守番をしていたところ／曽参の）友来（きた）れり。①これをもてなしたく思へども、曽参は内にはあらず、②もとより家貧しければかなはず、曽参が帰れかしとて、自（みづか）ら指をかめり。曽参（親しい友人がやって来た／もてなしたいと思うけれども／家にいなくて／（母は）曽参が帰ってほしいと思って／自ら指をかんだ）山に薪をⓐ拾ひゐたるが、ⓑにはかに胸騒ぎしける程に、急ぎ家に帰りたれ（胸騒ぎがしたので／帰ったところ）ば、母ありすがたをつぶさに語り侍り。かくの如（ごと）く指をかみたるが、遠（母はありのままをくわしく語ったのだった／このように／かんだのが）きにこたへたるは、一段孝行にして、親子の情（なさけ）深きしるしなり。そうじて曽参のことは、人にかはりて心と心との上のことをいへり。奥深きこと（とりわけ孝行であって／証拠である／一般に曽参のことは／他の人の孝行と違って／奥深い道理がとわりあるべし。（あるに違いない）

〈「御伽草子（おとぎぞうし）」より〉

（注） 曽参＝中国の春秋（しゅんじゅう）時代の人。孔子（こうし）の弟子として有名。

(1) ✪主語 ——線①「これをもてなしたく思へども」の主語を、古文中から抜き出しなさい。

(2) ✪現代語訳 ——線②「もとより家貧しければかなはず」の意味として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア もちろん家は貧しいが、もてなすことは簡単だと思い
イ もともと家が貧しいので、もてなすことができず
ウ 昔ほどは家が貧しくなく、もてなすこともできるので
エ 前よりも家は貧しくないが、もてなすことが面倒で

(3) ✪歴史的仮名遣い 〰線ⓐ「拾ひゐたる」を、現代仮名遣いに直しなさい。ただし、漢字はそのままにします。

(4) ✪古語の意味 〰線ⓑ「にはかに」の意味として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつも　イ 時々
ウ しだいに　エ 突然

(5) ✪主題 この話の趣旨として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 親子の強い絆（きずな）は深い道理にもとづくものであり、孝行で大切なことは心と心とのつながりである。
イ 子が常に親のそばにいることが一番の親孝行であり、外出時はできるだけ早く帰宅すべきである。
ウ 親の子供に対する強い愛情はいつか必ず子に届くので、親は子を信頼してその時を待てばよい。
エ 親子は言葉がなくても互いに気持ちが通じ合うものなので、親と子の会話は少なくても構わない。

ポイント

(2)は、「かなはず」は現代仮名遣いに直すと「かなわず」。何がかなわないのかを考える。(5)は、曽参と母のエピソードの部分と作者の考えを述べた部分に文章が分かれることに着目し、作者の考えを選択肢と照らし合わせる。

2　次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。　〈北海道〉

烏、*鵜にいへるは、いかに鵜殿、御身は*果報なるものかな。水の上に身を浮かめて息ひながら、何の苦労もなく、腹の下なる魚を安々と取りて食し給ふものかな。我等は終日飛びあるきても食にあふ事少なく、たまたま乾したる魚又は*菓子などを見付けても、皆主有りて守りきびしければ、*むねをひやして、*さふなく取り得る事かたし。此故に食つねに不足して苦し。疲れて羽を息めんとして木に止まれば、又脚の労あり。御身を学びて水に入りて魚をとらんとすれば、忽ちに水喰ふ。あな羨しの鵜殿や。飽き満ち給ふ食を少し此方へも施し給へかし。*咨惜御心かな、といふ。鵜答へていふ、烏殿烏殿、*さな思ひ給ひそ。それより見給ふには、水に浮かびて何の苦もなくて食を得侍ると思ひ給ふべけれど、水の中にて足を働かす事少しも隙なし。其の苦労大方の事にあらず。其の上魚も生ある物なれば、中々心易く取り得る事かたし。

〈西川如見「町人袋」より〉

（注）鵜＝水鳥の一種。　御身＝あなた。
果報なるもの＝幸せ者。
菓子＝木の実。
むねをひやして＝ひやひやして。
さふなく＝簡単に。
咨惜御心＝けちな考え。
さな思ひ給ひそ＝そのように思ってはいけない。

(1)　主語　線ア～エのうち、鵜の動作を表しているものを一つ選び、記号で答えなさい。　□

(2)　内容理解　線「あな羨しの鵜殿や。」とありますが、烏が羨ましいと思っている鵜の様子が具体的に書かれている一文を文章中から抜き出し、初めの五字を書きなさい。

(3)　主題　この古文には続きがあり、最後は、「人の世の有様なぞらへて知るべし。」と締めくくられています。この古文の内容から、人が教訓として受け止めるべきことはどのようなことだといえますか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分の苦労を嘆くだけではなく、他人も陰で苦労していることに気づくこと。
イ　自分は一人で生きていると思わず、支えてくれている人たちに感謝すること。
ウ　自分の考えだけで行動せず、他人からの忠告に耳を傾けることが大切なこと。
エ　自分では何も行動せず、他人の助けをあてにしているだけではいけないこと。　□

ポイント
(1)古文中に「　」を付けて、会話文と発言者を押さえながら誰の動作かを捉える。
(2)烏の発言の範囲を押さえ、その中で鵜の様子について具体的に述べている一文を抜き出す。(3)「なぞらへて」は「照らし合わせて」「比較して」という意味。烏と鵜のエピソードの中で、烏が学んだと思われることを考える。